

ライスのお兄さまがト レセン学園で働くお話

お兄さま第0号

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ライスシャワーのお兄さま（ガチ）が出てくるお話。

目次

お帰りなさい、お兄さま	—	1
トレセン学園 In 顔面凶器	—	10
それぞれの迎える朝	—	17
兄妹再会	—	24
やっぱり不審者なお兄さま	—	33
お兄さまの学園巡り その1	—	39
お兄さまの学園巡り その2	—	46

お帰りなさい、お兄さま

ライスシャワーのトレナーはお姉さまと呼ばれている。

それはトレセン学園のウマ娘なら誰もが知っていた。

しかし：彼女には、血のつながった本物の「お兄さま」がいるのだ。

これはそんなお兄さまが、トレセン学園で働く話である。

*

「お姉さま、おはようございます！」

「おはようライス。今朝は一段と張り切ってるね」

トレセン学園のレース場にて、一人の女トレナーとウマ娘が話していた。

漆黒の髪を靡かせた小柄なウマ娘、その名は「ライスシャワー」

女トレナーに走りの才能を見出され、数年前にメイクデビューを果たし多くのレースで勝利を取ってきた人気のウマ娘である。

普段は臆病で弱気な彼女が上機嫌で朝練をしていた。

準備運動を終えて、動きやすい体操服に着替えたライスシャワーが小走りで女トレ

ナーの近くに駆け寄ってきた。頬を緩ませて微笑を浮かべ、上目遣いで何かを訴えかけるライスシャワー。

上機嫌の理由を察して欲しいのだろうと、数年の付き合いで彼女の声に出さない言葉を察した女トレナーは、スキンシップの一環でライスシャワーの頭を優しく撫でながら聞いた。

「何か良いことがあったのかな？」

「うんっ！あのねあのね、お姉さま。数年ぶりにお兄さまから手紙が届いたのー！」

お兄さま——初めて聞いたその単語に女トレナーは首を傾げる。

一言補足すると、お姉さまと呼ばれている女トレナーとライスシャワーの間に血の繋がりは無い。彼女がお姉さまと呼ばれているのは、ライスシャワーが幼い頃に読んでいた絵本「しあわせの青いバラ」に登場するお姉さまと呼ばれる人のようだったから。

自分に関わる人を不幸にしてしまうと思ひ込んでるライスシャワーが変わるきっかけをくれた女トレナーを、ライスシャワーはお姉さまと慕って、女トレナーも彼女を年の離れた妹のように可愛がりながら、育てるべき大事なウマ娘として接してきた。

「そういえばお姉さまにお兄さまの話をするのは初めてだったかな……？お兄さまはね、ライスがトレセン学園に来るよりずっと前に、お父さんとお母さんの前からいなくなっちゃったの。時々手紙はくれるけど、何処で何をしてるか知らなくて……お姉さま

みたいに優しく、とつてもカッコいい、自慢のお兄さまなの！」

(ライスのお兄さまってことは……私と同じ年か、年下かな?)

女トレーナーが初めて会った時のライスシャワーは中等部、今は高等部でトレセン学園に在籍している。雑な計算だが、2、3歳の年の差と仮定すれば大学生か高卒の社会人ということになるのだろうか？

ちなみに女トレーナーは大学卒業と同時にトレセン学園のトレーナーになった。

研修期間を経て新人トレーナーだった彼女がライスシャワーと出会い、三年間のあいだにPre-OPからG1まで賞を取り、トレセン学園の理事長が開いたURAFアイナルズの初優勝まで手にした時は、関係者全員の度肝を抜いた。

数年の出来事に思いを馳せつつ、会話を続ける女トレーナー。

「手紙にはなんて書いてあったの？」

「うんっ、あのね……お兄さま海外にいつてたみたいで日本に帰ってきてから新聞とかでライスがレースで沢山賞を取ってるって知ったみたいで、お祝いしたいから近いうちに顔を出すって！お父さまとお母さまのところにもおんなじ内容の手紙が届いたんだって！」

女トレーナーの同期で担当ウマ娘共々交友関係のある「桐生院葵」から聞いた話なのだ、いつの間にか女トレーナーはトレセン学園でも優れた指導者の一人として認知さ

れているらしい。

かの有名なウマ娘のチーム・リギル、そのリギルにも劣らぬ個性的な実力派揃いのチーム・スピカ、二つのチームそれぞれを受け持つ先輩トレーナー達にも実力は引けを取らないとまで言われていると聞かされた女トレーナーは驚きのあまりその場でひっくり返った。

トレーナーになって4、5年の内に担当ウマ娘一人をあつという間にレジエンド級と呼ばれるまでの領域に育て上げたのだから、妥当な評価なのだろうが……。

笑みを浮かべるライスシャワーのウマ耳と尻尾を眺める女トレーナー。

ウマ娘の感情表現は、表情よりも尻尾と耳に出やすい。数年の付き合いでライスシャワーをはじめとする切磋琢磨してきた他のウマ娘も観察して分かったことだが、喜んでいる時は尻尾が左右に大きく振られ、耳がピンと立つ。

「早く会えるといいね」

「うんっ！……それじゃあお姉さま、朝練続けるね！」

「授業には遅れないようにね」

「分かったっ！いつてきまーす！」

頭を撫でられて更に機嫌のよくなつたライスシャワー。

笑顔で手を振りながらレース場の芝を駆けていく彼女を見送った女トレーナーは、ふ

と先ほどの会話の中で感じた違和感を引つ張り出して思考する。

(ライスが小さい頃に家を出てから……時期はどれくらいかまでは分からないけれど、海外で生活していた……？パスポートとかそこら辺の手続きには保護者の協力が不可欠とするなら、ライスの両親は家を出て行った理由を知っている。……何でライスにその話をしなかったのかしら……？)

女トレーナーの中で描かれるライスシャワーのお兄さま人物像。

血の繋がりを持つ家族なら、どこかライスシャワーと似通った点がある筈だろう。

すっかり見慣れたライスシャワーの朝練風景を見ながら、彼女の走るスピードやフォームに目を向けて、ぼんやりとお兄さま像を頭の中で描いていたのだった。

*

場所は変わってトレセン学園近くの駅にて。

朝の通勤ラッシュは東京近くというだけあって人の行き来が激しい。

生半可な歩みでそこに入ろうとする者は吹き飛ばされてしまいうだろう。

しかし——ある一箇所だけ通行人たちが小走りに避けて通っていた。

駅員たちも不安そうな面持ちで、その一箇所を見守っている。

「くあ……ふう……」

駅の改札口から少し離れた柱に背を預ける一人の男がいた。

日本人らしい顔立ちにも関わらず、身長2メートルの巨漢。

黒髪をオールバックにして、足元にはスポーツバッグが一つ。

そんな男に視線が集まっている理由は、その顔に刻まれた切り傷である。整った顔立ちを額の右斜め上から左下の顎まで生々しい傷跡がついていた。傷の周りが赤く腫れて、赤黒い瘡蓋があることからつい最近出来た傷だということが分かる。

欠伸を噛み殺して涙目になりながら手元の携帯を眺める男。

背が高いというだけで目立つ彼の顔に、生々しい切り傷が刻まれているというだけで彼をかたぎの人間ではないと勘違いする者まで出てくる始末。臆病な駅員は、警察に通報するべきか迷っているくらいだ。

「……日本の朝は平和だねえ……」

ぼつりとそう呟いた男はようやく動き出した。

男が手に持っていた携帯に映し出された現在時刻が八時を示したからだ。

足元のスポーツバッグを片手で担いで歩き出す男。

通行人たちはバツと勢いよく道を譲り、駅員たちは固唾を飲んで見守る。

「……はあく……こんな傷一つで大袈裟じゃね？」

自分が注目的になっていることを理解していた男。

しかしその理由が男にとって他と大差ない傷一つであり、そんな傷如きで別の生き物

であるかのように見られるというのは何とも肩身の狭い思いをしているわけだ。

男の独り言を通行人たちが聞く筈もなく、足早に去っていく。

そんな時だった――

「きゃっ!」

「ん、おっと」

遅刻しそうな電車通学の小学生の女の子が飛び込んできた。

その手には飲みかけだった蓋の開いたジュースが握られていた為、転倒した女の子の手から離れたジュースの容器は宙で弧を描き……見事に男の服へと中身をぶちまけてしまう。

通行人たちの心臓が凍り付いた。

駅員たちは大慌てで助けに入ろうとするが、人混みが邪魔して進めない。

「い、てて……」

「大丈夫か嬢ちゃん? 走ると危ねーぞ」

「うん、だいじょうぶ……ぶ……ぶ……」

手を差し伸べられて、それを掴んだ女の子は立ち上がると同時に顔を上げ――

「自分がすつころんで服を汚してしまった相手が強面の巨漢であると気づく。

見る見るうちに青褪めた顔になり、目元にじわあと涙が浮かんだ。

周りの通行人は助けの手を差し伸べたいが……怖くて声をかけられない。

「……………」
「ごめんなさい……………」
「ツ！」

「ああ、こんくらい平気だ」

悪いのは駅の構内を走っていた女の子なのだが、絵面的に男の方が女の子を泣かせているように見えてしまい、最初の状況を分かっていない周りから非難の視線が向けられる。

男は苦笑して足元に転がったジュースの容器を拾い上げた。

その時、小刻みに震える女の子に尻尾が生えていることに気づく。

「……………」
「君、ウマ娘か」

「……は、はひ……」

男は何か思うところがあったのか、女の子の顔をじつと見つめる。

脳裏に過ぎるのは、数年間会っていなかった妹の成長した姿。

あの弱気で臆病だった妹が、日本のウマ娘レースで数々の賞を取ったという記事を読んだ時には年甲斐もなくその場で声を上げて喜んだ男。その時も周りの人からドン引きされている。

いつまでも女の子の顔を眺めている訳にもいかず、男はさつと道を譲った。

「引き止めて悪いな。……………」
「学校に行くんだろ？早く行きな」

「……で、でもっ……お洋服、汚したから……」

「気にしねえよ、それより落とした容器はちやんと捨てとけよ？」

女の子に手に中身がほぼ空になった容器を渡した男。

彼が荷物を持つて歩き出すと再び道が割れて人が避けて通っていく。

女の子は呆然とした様子で、男の背を見つめ続けていた。

「……さあてと……俺も俺で行きますか——トレセン学園に」

トレセン学園 In 顔面凶器

朝のトレセン学園、そこには青を基調とした制服に身を包んだウマ娘達が授業を受けに正門から続々と集まってくる。

既に朝練を終えて学園内にいる者は、教室でクラスメイトを待っていたり、朝練の疲れから小睡眠を取る者までいた。

トレセン学園の理事長秘書である駿川たづな。

彼女の日課は朝早く学園に来るウマ娘達を正門で迎えることだ。トレーナーほどではないが、彼女は挨拶を交わすだけでウマ娘の調子の良し悪しが分かる慧眼の持ち主である。

「おはよう御座います、ウオツカさん、ダイワスカーレットさん」

「おはよう御座いますっ!!」

笑顔で挨拶をするたづなの前を、2人のウマ娘が全速力で駆け抜けていく。

チーム・スピカ所属のウオツカ、ダイワスカーレット。

同じチームにいなながら、彼女たちは互いをライバル視しており、今のような学園に登校するまでに競走するなど日常の風景である。

「おはよう御座います、ゴールドシップさん」

「グツモーニング」

正門前に現れたのは、セグウェイに乗った芦毛のウマ娘。

チーム・スピカ最古参のゴールドシップである。

破天荒という言葉がこれほど合うウマ娘は彼女くらいだろうと学園関係者（ウマ娘含め）から言われている彼女が、なぜセグウェイに乗って優雅に登校しているのか……たづなは深く考えないことにした。

ゴールドシップ on セグウェイが校舎の中に入っていったあとも、続々とウマ娘達が出た。たづなに挨拶をしてくる。

ニンジン啜えたまま駆けるスペシャルウィーク、そんな彼女を微笑んで見守り並走するサイレンススズカ、彼女達の仲睦まじい姿を羨ましそうに見ているグラスワンダー等々……

時間はあつという間に過ぎていき、そろそろ正門を閉めようとたづながその場から動き出そうとした時だった。

「ああ……ちよい聞いてもいいか、そこのお姉ちゃん」

「はい？」

声をかけられて反射的に声の方へと振り向いた。たづな。

目にした声の主を見て、彼女は暫く言葉を失った。

声をかけたのは駅から歩いてきた顔に傷のある巨漢である。

「トレセン学園の事務所受付ってどこにあるかね」

「……………」

トレセン学園は、ほぼ毎日外部から人間を招き入れる。

大半がレースに出走するウマ娘を記事にしたいという報道関係の人間で、残りは学園の備品等で付き合いのある業者やトレセン学園在学生の親族など。

紳士的な振舞いを欠かさない者もいれば、昭和漫画に出てきそうなチンピラヤクザみたいな者まで十人十色。たづなはその殆どをにこやか営業スマイルで対応してきた。

そんな彼女が恐らく人生で初めて目にするであろう顔面凶器^{やべい奴}。

男の服装におかしな点はない。ライトグレーのシャツに黒のジャケット、ネイビーカラーのデニムという若者らしいファッションセンスが見て分かる。

大手スポーツ用品メーカーのロゴが入っただけの、荷物が少し多めに入っているかな？ くらいの印象しか受けない斜め掛けのスポーツバッグ。

渋谷とか原宿にいても違和感はない……顔を除けば。

鋭い目つきは猛禽類を彷彿とさせる。への字に見える口元は見るからに不機嫌ですという雰囲気を漂わせ、そこに特大サイズの生々しい切り傷。

たづなの脳が正常に稼働するまで、数秒の間を要した。

「……………」

「おーい、姉ちゃん？聞こえてつかー？」

「——はっ!?!」

一時停止状態から抜け出して、たづなは正常な判断力を取り戻す。目の前の巨漢が未知の存在だったとしても、トレセン学園の理事長秘書である自分のやることは変わらない。

「ごめんなさい、ちよつと考え事をしていました。——それで事務所受付の場所ですね？私も事務所の近くに用がありますので、ご案内致します」

「そうか、悪いな頼むわ」

しつかりとお辞儀して男を先導するたづな。

男は内心「こんな美人さんにまでドン引きされるとかショックで寝込みそう…」とか思っていたのだが、一般人よりはしつかりと対応してくれたことに嬉しさで涙が出そうだった。

この男、空港で二回、乗り継いだ駅前の交番で三回、徒歩での移動の最中に路上で二回の計七回職務質問を受けるといふ悲惨な目に遭っているのだ。

懐かしの故郷の土を踏んだと思ったら不審者扱いばかり。

流石に心が折れそうだったのだ。

*

トレセン学園の校舎の中を通って、裏手に事務所がある。

男の視界の端で教室の窓からウマ娘達の横顔がちらりと映った。

もしかしたら窓際に妹が座っているかもしれない。そう思つて男は窓の方をじつと見つめようとしたのだが——偶然目があったウマ娘はビクツとして視線を逸らした。

「……Oh……」

「……どうかなさいました？」

前を歩きたづなが、肩を落として落ち込む男を不審そうに覗き込む。

男も流石に窓の方を理由もなく見つめていては不審者と思われるなど、恥ずかしそうに頬をポリポリ掻きながら答えた。

「トレセン学園に妹がいてな……何年も顔を合わせてないから、もしかしたら窓際に座ってるんじゃないかなあなんて思つてみただけさ」

「……学生さんの親族の方だったんですね」

「ああ………こんな顔じゃそう思えないだろうけどな！」

自虐めいた笑いを零す男、たづなは返事に困つてしまう。

「そんなことありませんよ！」と言いたいが、先ほどまで顔面凶器に怯んでいた自分が

言つても説得力はないだろうし「そうかもしれませんね！」なんて言つてしまえば、男が更に落ち込むか逆上する可能性だって無きにしも非ず。

目的地が近づいたことに気づいて、唐突に話題を変える。

「くっそろそろ事務所が見えてきますよ!」

「おつ、そうか。悪いな姉ちゃん、助かったわ」

「いえいえ、ではこれで——」

分かれ道に差し掛かり、たづなは事務所の向かい側の建物へ。

手を振つて笑顔を浮かべる男に、たづなも笑みを送り返した。

やがて男の姿が見えなくなると……真後ろから声が掛かる。

「駿川さん、おはようございます」

声をかけたのはチーム・スピカのトレーナー沖野。

常備の棒付きキャンディーを啜えて陽気に挨拶をする。

そんな彼へと振り返つたたづなは、ついに堪えていた感情を吐き出す。

「お、沖野さん……!」

「おわつ!?!どうしたんですか、そんな顔して……!」

「ハ、ハ、ハ怖かったですよお」

生まれたての馬よろしく小刻みに足を震わせて、涙目のたづな。

普段の彼女からは想像も出来ない姿に面食らう沖野。

ちなみにだが、周囲には他のトレーナー達が歩いていたりするので……

困惑する沖野に縋りつく泣きそうな顔のたづな。

ついに担当ウマ娘だけじゃ飽き足らずトレセン学園の良心とまで呼ばれるたづなにまで手を出したのかという不穏な噂が流れるようになるのだが……それはまた別の話。

それぞれの迎える朝

「おはようライスちゃん!!」

「お、おはようウララちゃん」

開口一番、朝練を終えて教室に入ってきたライスシャワーを出迎えたのは小柄なウマ娘。

トレセン学園でもっとも周りから愛されるウマ娘、地方ウマ娘達の英雄ハルウララ。

ハルウララは椅子から飛び跳ねるように立ち上がって、ライスシャワーの下へ駆け寄った。

「今朝もトレーニングお疲れさま! 今日も楽しかった? 眠くならない?」

「う、うん…平気だよ。お姉さまとたくさんお話出来たから…」

「そっかー! ウララもね、朝はトレーナーと一緒にご飯食べたんだよ!」

ハルウララのトレーナーはライスシャワーのトレーナーの一個上の先輩である。

レースの才能がないと言われても挫けることなく挑み続けるハルウララを、短距離では負けなしの差しウマ娘として中央で名を轟かせた。

米食をやけに推してくる事、熱血漢過ぎて居る場所の天候を左右する等の逸話を持つ

ている。

「ウララちゃん、次はオープンレースに出るんだよね？」

「うんっ！トレーナーがね、頑張れ頑張れ出来る出来るウララなら絶対出来る！もつとやれる気持ちの問題だ同期のライスシャワーだつて頑張ってるんだから！つて言ってくれて、朝ごはん食べた後にデザートバナナまで買ってすごく嬉しかったの！」

「あ、朝から元気だよね……ウララちゃんのトレーナーさん」

ライスシャワーも何度か会ったことはあるが、見えない炎のオーラでも纏っているような男のトレーナーに怯えてしまい、いつも女トレーナーの背中に隠れてしまっていた。

情に厚く、涙脆い、何事にも全力で取り組む彼とハルウララの相性は抜群なのだろうが……

ちなみにハルウララが出走予定のオープンレースは襷ステークス。

一番人気ハルウララ、二番人気タイキシヤトル、三番人気スマートファルコン。

タイキシヤトルもスマートファルコン兩名共に実力ではハルウララに引けを取らない。

それでも……とライスシャワーは心の中で確信している。

「絶対に……ウララちゃんは絶対に勝つよ」

「ありがとう、ライスちゃん！ねばーぎぶあつぷだね!!」

「ね、ネバーギブアップ?」

普段は難しい言葉を使わない彼女から横文字言葉が出てきたことに面食らうライスシャワー。

いつまでも教室の入り口で固まっている訳にもいかず、ライスシャワーは自分の席に座る。

彼女の席は窓際から2番目の列の後ろ側。ハルウララはその隣、窓際に座った。

「トレナーがウララに教えてくれたんだよ！諦めない気持ちの合言葉だつて!」

余談だが教えた時は丁度朝ごはんのタイミング。

ハルウララとそのトレナーは朝ごはんに納豆を食していた。

近くで食事を取っていたトレセン学園の生徒会長シンボルドルフが「納豆の感触であるねばあとNever give upのNever^ネをかけてねばーぎぶあつぷ! ——「ンフツ」と口元を抑えて笑い、それを見た副会長のエアグルーヴが頭痛でこめかみを指で押さえていた。

それから暫くの間、担任教師がやって来るまで二人のお喋りは続いた。

ライスシャワーとハルウララ、3年近くの付き合いがある2人は大の仲良しである。

*

時を同じくしてトレセン学園の事務所受付前では――

「そ、それでは此方にお名前記入と……此処に来た理由を簡潔にお願いします」
「ウツス」

受付をやっていた女性は涙目で同僚達にヘルプサインを送っていた。

しかし同僚達も目の前をとんでもない来客に対応するのは嫌だと無言でサインを受け流す。

顔に傷のある巨漢は荷物を足元に下ろして、紙に自分の名前とトレセン学園に来た目的を書いた。

沈黙の間、受付嬢は呼吸をするのもやっとな様子で男が書き終わるのを待っている。

「――っし、これでいいっすか……ですかね？」

「は、はひつ。確認致しますので少々お待ちをっ」

言葉遣いが見るからに年上の受付嬢相手にマズいものかと思いき口調を変える。

しかしそんな事を気にする余裕もなく、受付嬢は差し出された用紙に目を通す。

そして……男の名前の欄を見て思わず心の中で突っ込んでしまう。

（その見た目でこの名前はねーよ!!）

そんなことを口にしてしまえばどうなるか……考えただけで恐ろしいそれを心の中に

しまう。

理由のところにおかしな点はなく、受付嬢は男に行き先を促す。

「面接の予定時間は10時半からとなっておりますので、そちらを右へ進んで2階へと上がり、目の前にある応接室でお待ちください。お荷物等は室内に無料貸し出しのロッカーがありますのでそちらをご自由にお使い下さい」

「どもつす。そんじゃこれにて——」

男が荷物を持ち直し、階段へと上がって姿が見えなくなるまで受付嬢は固まっていた。

やがて足音も聞こえなくなった途端に受付嬢は背もたれに深く沈みこんだ。同僚達が憐れむような視線を向けて来るが、助けに来なかったことを恨んで受付嬢はジト目で睨み返す。

机に置かれたままの用紙を再度見つめてぼつりと一人呟いた。

「これから何度もさっきの顔を見るのかあ……」

トレセン学園にも一風変わった人、ウマ娘は沢山いる。

事務所受付をやっている彼女達は大抵のことでは驚かないつもりだった。

強面で言えばライスシャワーのライバルと目されるウマ娘のトレーナーが、服装や声のトーンから本物のヤクザと間違われるくらいには強烈だったからだ。

……さっきの男は更にその上をいく恐ろしい存在だったか……

(あの顔も何週間かしたら見慣れちゃうんだろうなあ……)

事務所の受付という職業故に、或いは中央のトレセン学園という日本屈指の魔境故に慣れという現象に最も親しみを覚えているのは彼女達だった。

そして受付嬢に促されて応接室に向かっている男はどう思っているかと思えば――

(すっげえ……改めて見ると日本の学校で床も壁も綺麗なものだなあ……。そらお国のお偉いさんも教育に金が掛かり過ぎるって嘆くわけだ……)

廊下を歩きながら、洋風チックな校舎内の造りを見て感心していた。

ある理由で海外を飛び回っていた男にとって、久しぶりの故郷は再発見と驚きの連続だった。

電車の発車時刻が数分遅れたら謝罪のアナウンスが流れ、喫茶店に入っても人種で座る場所を分けられることはなく、道端の公園で蛇口を捻ったら出て来る水は飲んでも腹を壊さない。

…事情が特殊な国なら昼夜問わず銃声やら爆発音やら聞こえるところもあった。

久しぶりの日本をゆっくり見て回りたい気持ちがある男にはあった。

しかし……それよりも真つ先に、男の脳裏に過ぎつたのは幼い妹の姿。

『おにいさま、絵本よんで！』

『今日ね、おかあさまと一緒にレース見に行ったの！』

『おやすみなさい、おにいさま』

彼が家を出るといふ話をした時は、泣きながら妹は兄を引き止めた。

最終的にはしつかりとお別れを言うことが出来ず、置手紙を残して家を出た。

それから5、6年間……何度か生死の境を彷徨いはしたが、彼は日本に帰ってきた。

妹が学園の何処かにいるのなら、大声を上げて探し出すのも面白いかも知れない。

……等と若干危ない考えを頭の片隅に追いやって男は階段を上っていく。

教室の方から元気のよい挨拶の音が聞こえてくる。

男はスマホに映る時間を見て納得の声を漏らす。

朝の8時半、学生達の朝のホームルーム活動が始まる時間である。

兄妹再会

一時間目の授業は教室での座学を中心に、ゆっくりと進んで終わりを告げようとしていた。

ライスシャワーは机のうえで広げた教科書を閉じて机の中にしまう。シャープペンの芯を替えて、黒板に書かれた内容を書き写したノートに漏れがないか確かめる。

隣に座るハルウララは授業が終わったにも関わらず、教科書を読み続けていた。

彼女は真面目に授業を受けていても、難しい言葉が羅列する問題を前にすると頭を抱えて小刻みに首を回す癖がある。今回の授業でもそれがあって、彼女なりに問題を解こうとしているのだろう。

トレセン学園に入ったばかりの頃の彼女であったなら問題に対する正しい答えを出すことなく、彼女なりの分かり易い解釈で噛み砕いて納得していただろう。

そうしなくなったのは、勤勉にしてバカがつくほど真面目な熱血漢トレーナーのお陰である。

ライスシャワーは微笑み、敢えてハルウララに声をかけなかった。

彼女が必死になって問題を解こうとしているのを邪魔したくなかったから。ハルウララから視線を外し、窓の外に吹く風に揺れる桜の並木を見つめる。晴れ渡る青空と太陽の下に……お兄さまも立っているのだと。

「お兄さまに早く会えたらいいなあ……」

ライスシャワーはまだ知らないだろう。

この後の授業が終わって移動教室の際に、その口にした願いが叶うことを。

結局、ハルウララが問題を解いて答えを出す前に二時間目の授業は始まった。

「ライスちゃん！ 次の移動教室まで一緒に行こう！」

「うんっ。……ねえウララちゃん。アレって、たづなさんだよな？」

移動教室の前の休憩時間、二階の廊下を歩いていたハルウララとライスシャワー。

ライスシャワーが視線を向けた先にいたのは、段ボールを三箱抱えるたづなの姿。

鼻先が少し赤くなっており、表情に何時ものような明るさがない。

気になった二人は顔を見合わせて、ささっと近づいて声をかける。

「たづなさん。お荷物運ぶの……迷惑でなければお手伝いしますよ……？」

「あつ、ライスシャワーさんにハルウララさん。……いえ！ 大丈夫ですよ、これくらいの荷

物つとと——」

明るく振る舞おうとするたづなだったが、逆に足元がふらついてしまう。

咄嗟に回り込んだハルウララが段ボールを一つ抱える。

ずっしりとした両手で抱えきれない程の段ボールには相当重いものが入っているよ
うだ。

「ウララ、お手伝いするよっ！」

「……すいません、少し先の応接室まで……お願い出来ますか？」

「はいっ」

ライスシャワーがその手に箱を一つ抱えて、ハルウララが先頭を歩き出す。

傍らを歩きたづなが落ち込んだ様子でため息を吐いたのをじつと見るライスシャ
ワー。

ハツとした彼女は申し訳なさそうに笑みを浮かべて訳を話した。

「実は今朝、とても大柄な男性の方に声をかけられて……。ただ大柄というだけじゃな
く、顔に大きな切り傷のある、なんとというかその……大変な強面の方だったので、驚い
てしまつて……それから顔を直視し辛くて、頼まれたのにしっかりと事務所まで案内出
来なかったので、秘書である自分に不甲斐なさを感じてしまつて……」

「体の大きな……男の人？」

パっと思いつくのはライバル、ミホノブルボンの黒沼トレーナーである。

サングラスに黒い帽子と、ドスの利いた低い声が特徴的な黒沼トレーナーだが実際に

面と向かつて話をしてみると面倒見の良い優しい人であると分かった。

たづなの話を聞いたハルウララは、顔に傷と聞いて「痛そうだね！もしウララが会ったら絆創膏あげなきゃ！」と言っていた。

しかしたづなは黒沼トレーナーとも普通に話が出来ている。

そんな彼女が驚くくらいなのだから、相当な人物なのだろう。

*

「歓迎ッ！私がこの学園の理事長を務めている、秋川やよいである！」

「……あッ、こいつあご丁寧に……どうも」

応接室で暫く待っていると、勢いよく扉を開けて入ってきた者がいた。

幼い日の妹くらいに小さな体で、頭に被った帽子のうえに猫を乗つけた子供。

秋川理事長がソファーに腰かける前に「自己紹介！」と書かれた扇子をバサツと開いた。

「確認ッ！君が学園の用務員応募枠に募集した者で合っているかね！」

「送付した書類と、そこに映る写真の顔が俺であるなら。間違いはないかと」

「ふむっ……」

言われるな否や秋川理事長は机の上に置かれた茶封筒を開く。

それは予め応接室に準備してあった、今回の面接試験を受ける者の提出書類だ。

「真志場 御幸君ッ！二十四歳・男性！身長・体重・ライバシーの為秘匿ッ！都内の公立高校卒業と同時に国連が推奨していた国際ボランティア活動に参加ッ、以降五年近く世界中を転々としていたと経歴に書いてあるな！志望動機、特に無しとっ!?」

「ん、合ってますよ。マシバでもミユキでも、好きに呼んで下さい」

「ではマシバ君に敢えてこの質問しよう！志望動機がないのは何故かッ！」

顔に傷のある巨漢……ミユキは困った様子で頬をポリポリと搔いた。

先ず第一に困惑する。目の前の五、六年前に離れたつきりの妹と大差ない年齢くらいの幼女が就職先の理事長を務めているということ。

次にそんな可愛らしい見た目からは想像も出来ない独特な喋り方と威風堂々な振舞いに驚かされた。

「正直、高卒で数年間ボランティアだからって綺麗なお題目だけでやらんばらんに生きてきた俺じゃマトモな企業務めなんて難しいと思っただんで……丁度その話を海外のボランティア先で仲良くなった同僚達にしたら、日本のトレセン学園は文字通りの人外魔境な職場だから、お前みたいなのは意外に天職かもしれないぞって言われて……」

「心外ッ！我がトレセン学園はそんな恐ろしい人外魔境などではないッ！全てのウマ娘達に等しく夢と希望を与える安心できるアットホームな場所である！」

世のブラック企業を知る者達からすれば、信用してはいけない単語のオンパレードである。

しかし…とミユキは心の中で応募条件に書かれていた内容を思い出す。

雇用形態は住み込みのアルバイト、衣食住の保障もある他賞与や長期休暇もある。

給料も大卒が貰える初任給の倍以上、昇給等もあるという。

要求される資格等は特にない。強いて重機の免許や栄養士などあれば良しということころ。

「俺にとつちやマトモに働くのはこれが初なんで…スイマセンけど、やっぱ志望動機って言えるほどの建前はないっスね。強いて雇用条件がかなり良いからとしか」

「直球ッ!?しかしそういう裏表のない言葉の方が信用も出来るというものか…」

秋川理事長は渋々納得してソファーにぼすんつと座り込む。

見た目で分かる華奢な体を簡単に受け止めるソファー。その一方でミユキの座る方のソファーは彼の体重を支えんと、柔らかいクッションが皺を伸ばして深く沈みこんでいた。

「では志望動機についてはこれくらいにして…今後についての話をしよう!」

次に開いた扇子には「面接開始!」と大きく書かれていた。

思っていた(雑誌等に書かれている)面接の風景とは違う状況に首を傾げるミユキ。

まあ堅苦しい会話よりはこっちの方が楽でいいかと頬を緩ませる。

……そして秋川理事長が自分を見て怯えなかったことにちよつとだけ喜んだ。その時である。

コンコンコンツと扉を叩く音が三回、秋川理事長が「入れ！」と声をかけた。ガチャリとドアノブが周り、反射的にミュキも顔を向ける。

「理事長、本日の用務員試験採用の方のお荷物をお持ち……しました——」
「わあっ！本当にたづなさんの言つた通りだ！顔におつきな傷——」

先頭に入ってきたのはトレセン学園の正門で声をかけた女、たづなである。

彼女もまさかミュキが用務員枠で応募した人間だとは思わなかった。その強面が若干脳裏に焼き付いて、次は驚かないようにしなきゃと思つた矢先に目を見開いて言葉を失つてしまった。

その後ろからぴよこつと入ってきたウマ娘が二人。

ピンク色の髪を揺らしてミュキをまじまじと見つめる小柄なウマ娘ハルウララ。

そして——

「…………お兄さま…………？」

ドクン！とミュキとライスシャワーの心臓が大きく跳ねた。

視線が交差して、互いの脳裏に幼い頃の光景が白黒映像となって蘇る。

ライスシャワーの記憶、泣きじやくつて部屋隅に蹲る自分を撫でる兄の手と笑顔。

ミュキの記憶、泣き疲れて眠った妹の額をそつと撫でて涙を押し殺して家を出た自

分。

あれから五年も経った。

目の前でソファーに座る男はたづなの話した通り確かに強面で顔に傷がある。

しかしどれだけ顔つきが変わってしようと、血の繋がった兄の面影がそこに残っていた。

手に持っていた段ボールを落としたことにも気づかない黒髪のウマ娘。

黒い帽子と造花の青いバラ、五年前から変わらない妹の好きだったものがある。

「…ライス、ライスシャワー……？」

「くくくッお兄さまっ!!」

一目散に駆け寄ってきたライスシャワー。

ソファーから立ち上がったミュキは両手を広げて彼女を迎える。

大きな大きな彼の両腕に、すつぽりと収まる小柄なライスシャワーの体。

ウマ耳は不規則にピコピコと跳ねて、尻尾をブンブン振り回す。

「ライスシャワー!!!」

「お兄さま、お兄さま、お兄さま——うぐつ、ふえええつ!!」

力いっぱいミユキの体を抱きしめて、ライスシャワーは喜びのあまり泣き出す。

ミユキは満面の笑みで彼女の後ろ髪を優しく撫でつけ、背中をポンポンと叩いていた。

突然の兄妹の再会に、秋川理事長とたづな、ハルウララですら驚いて固まっていた。

「お前ツ、ライス！五年のあいだに大きくなつたなあ……」

「お兄さまも……だよつ……！ずつと……ずつと会いたかつたよおつ……！」

それから暫くのあいだ、兄妹は再会の抱擁を続けていた。

五年間の孤独を埋める作業が、掛かり気味にスタートを切つたのだった。

やっぱり不審者なお兄さま

これはまだまだウマ娘として大成する前のライスシャワーのお話である。

ごく普通の一般家庭に生まれた彼女には年の離れた兄、御幸がいた。

幼い頃から家に籠りがちのライスシャワーの遊び相手はほとんど御幸だった。

彼もまだ小学生だったが、妹の我儘に嫌な顔一つせず付き合っていた。

人形遊び、絵本の読み聞かせ、絵描き……活発な男の子が好む遊びではないだろうに。

「お兄さまっ、つぎはこれがいい!」

「青いバラの絵本か。ライスはこの本が本当に好きなんだな」

「うんっ!」

晴れた空の下、家の和室で二人はいつものように遊んでいた。

人形を片付けて棚に戻す御幸の傍で絵本を差し出すライスシャワー。

彼は領いて座布団の上に座って彼女に絵が見やすいよう広げる。

小さなウマ耳をびこびこ動かして、ライスシャワーは御幸の隣にぺたんと座った。

「むかし、むかし。あるところに——」

ゆっくりと絵本の脇に書いてある内容を声に出して読み始める御幸。

ライスシャワーはそれを聞いて絵本の世界にのめり込んでいった。

それから暫くして陽が傾くころ、御幸は絵本を読み終えて傍らのライスシャワーへ視線を向ける。

「すう……くう……」

絵本の内容の途中で泣いて、喜んでと感情移入が忙しかったライスシャワーは眠っていた。

御幸は微笑み彼女の髪をそつと撫でると、近くから座布団を二枚引つ張り出す。

華奢な妹の体をそつと抱き上げて、並べた座布団の上に寝かせると上からタオルケットをかける。

「おやすみライス」

そう言つて御幸は部屋の片づけをしようと立ち上がろうとしたが――

不意にライスシャワーが彼の服の裾を引つ張り、動きを止められてしまう。

目を丸くして驚いた彼だが、仕方ないと云つた風に笑つてその場に座り直す。

それから母が帰つてきてライスが目覚めるまで、御幸はそこでじつとしていた。

*

「中断ッ！ 兄妹の再会を優先しつつ、ライスシャワーとハルウララ両名は授業に戻りつつ道中までマシバ君と話しながら歩くといい！ 戻ってきたら面接再開とする！」

と理事長の粋な計らいでトレセン学園の校舎内を歩く三人。

ハルウララは興味津々といった様子で二人の左右を移動して回り

ライスシャワーは恥ずかしさ半分、嬉しさ半分に御幸と手を繋いで歩いている。

「へえーっ！それじゃあライスちゃんのお兄さんっつと海外にいたんだー」

「ああ」

「ねえねえ、その傷って痛くないの？」

「ん？ああ、これな。ずっと前の傷だから、触られても平気だよ」

ハルウララの無邪気な質問に淡々と答える御幸。

心の中で「俺と話してもビビらない子とか妹以外にも天使が!？」と感涙に咽び、これから絶対に彼女とは仲良くしようとは決心しているのだった。

一方でライスシャワー、繋いだ手に頭を預けて尻尾をブンブン振っている。

掛かっているのだろう、一呼吸おいて落ち着くのも惜しいほどに。

やがて質問の途切れたハルウララに代わってライスシャワーが口を開く。

「……………ねえ、お兄さま」

「どうしたライス」

「……………寂しかった？」

本当は御幸から言うべき言葉を先にライスシャワーは言ってしまった。

手は繋いだまま、ほんの僅かな時間で御幸は足を止めて彼女に視線を合わせる。

ライスシャワーも恐る恐る彼を見上げて――

「当たり前だろ」

「――ツツツ!!」

分かり切っていた答えを口にした御幸に、ライスシャワーは息を呑んで人目も憚ることなくギュッと強く抱き着いた。もう片方の腕を彼女の背に回して御幸は更に言葉を続ける。

「寂しい思いをさせてごめん、ライス。嘘ついていなくなったりしない。兄ちゃんライスの目が届くところに絶対いるからさ。……あの時のこと、許してくれるか？」

「……うんっ……うんっ!」

御幸の言うあの時とは二人が離れ離れになった時のこと。

御幸が海外に出て行く話をした時、幼いライスシャワーは泣いて彼を引き留めようとした。

彼女が泣き止んで眠るまで御幸は「何処にも行かないよ」と嘘をついていたのだ。置手紙には「嘘ついてごめん」と書いたが、御幸はずっとそれを後悔していた。

また泣き出しそうになるライスシャワーの頭を撫でる御幸。

兄妹の感動的な場面の横でハルウララはまた無邪気に「よかったねー!」と笑う。

するとそこへ――

「ちよわっ!!?報告にあつた不審者発見!学級委員長は見逃しませんよおっ!バクシン、バクシーーン!!その貴方、止まって下さあああいつ!」

「あれっ?サクラバクシンオーさんだ!」

「ば、バクシンオーさん!?ふ、不審者つて――」

「不審者………まあ、俺の事だよな、絶対……ハハッ、ハハハ……」

廊下の向こうから全速力で駆けて来るのは鹿毛のポニーテールを揺らすウマ娘。

学級委員長であり短距離なら無敵と呼ばれるほどの実力者サクラバクシンオーだった。

キキイイイツ!と急ブレーキをかけて三人の前で止まる。

ハルウララが「いつも元気だね!ウララも負けずにくうーららー!」と返す。

ライスシャワーは驚きつつも彼女の言う不審者を探そうと左右を見回した。

御幸だけは自分のことだとすぐに気づいて、渴いた声で自虐的に笑う。

「さあ、不審者さん!この学級委員長が来たからには大人しくお縄に――」

「ま、待つてバクシンオーさん!この人は不審者じゃないんです!私のお兄さまなんです!」

「す!」

「ちよわっ!?!なんと!?!ライスシャワーさんのお兄さまであらせられましたか!」

「なあハルウララちゃん「ウララでいいよ！」ウララちゃん、俺って不審者に見えるか？」
「わかんない！でも優しい人だってウララは思うよ！だってライスちゃんのお兄さんだ
もん！」

「そうか……ありがとな……」

この時、不審者扱いされたことで凹んでいた御幸は気づかなかった。

理事長、ハルウララに続いて身内以外で彼の傷を見ても驚かなかった者。

その中にたった今やってきたサクラバクシンオーが含まれていたことに……

お兄さまの学園巡り その1

応接室に戻ってきた御幸と理事長、秘書のたづなを交えた面談はとんとん拍子で終わった。

面接の中で様々な質問に答えた御幸は人格的に問題無しと理事長に太鼓判を押されて、業務内容や業務時間に関する様々な説明を済ませた後のこと。

「提案ツ！ウマ娘達は放課後から本格的に練習を始める。今の内にマシバ君はトレセン学園の校舎以外の施設をたづな君と一緒に見て覚えてくるといい！」

「それはありがたいですね。この学園は思ってたより広大で……」

たづなも初めて会った朝方の失敗を働きで取り戻そうとやる気のようにだ。

自信に満ちた笑顔を浮かべて握手を求める理事長に、御幸も自然を笑みを浮かべて応じる。

「それでは改めて宜しく頼むぞ！真志場御幸君！」

「此方こそ秋川理事長。これから宜しくお願います」

*

先に退出した理事長を見送って、荷物を部屋に置いた御幸とたづなも応接室を出る。

理事長の話にもあった通り校舎内は授業中のウマ娘の邪魔になる為、日を改めて教室の位置や仕事に必要な道具の置き場などの説明を受けることにした。

二人がまず向かったのは校舎の正面入り口を出て三女神石像がある噴水の十字路を左に曲がった先にある屋内運動場、分かり易く言うなら体育館と講堂である。

千単位の生徒を抱えるトレセン学園の体育館は普通の学校のそれとは規模が違った。

「おお……」

「正面の出入り口は生徒用、教職員その他関係者用は此方になります」

そう言つて靴からスリッパに履き替えた二人は体育館内へと入つていく。

スライド式で木製の両開き扉は閉じていて、中から床を擦る音とボールの弾む音がする。

たづなは後ろの御幸に向かつて少しだけ躊躇いながらも言った。

「生徒の皆さんは授業中なので、なるべく邪魔にならないように小声で端を進みながら館内の説明をしますね。……それと……マシバさんには申し訳ないんですが、なるべく生徒達とは顔を合わせない方がいいかもしれません」

「あー確かにそうっスね———そうですね」

既に応接室の中で自分が不審者扱いされたという事を笑い話のつもりで伝えた御幸。

それに対して理事長は「心外ッ！人を見かけで判断してはいかんだらう！」と言つて

いたが、彼女の後ろでたづなは物凄く気まずい表情を浮かべて二人から顔を背けていたのだ。

自分の顔に手を当てて口調を直しながら納得して頷く御幸にたづなは間を置いて頭を下げる。

「……すいません。こんな失礼な事を採用したばかりの方に……」

「いやもう気にしてないんで大丈夫ですよ駿川さん」

「……そう言つて頂けるとありがたいです」

たづなは両開き扉の取っ手を引いた。

中では中等部のウマ娘達が体操着に着替えてバスケットボールをやっている。

遠くにいたジャージ姿の教師が御幸を見てギョツとした表情になるが、その前にいるたづなが笑みを浮かべて軽く会釈をしたことで事情を察したのか頷きだけ返して生徒達に向き直った。

入り口の扉を閉じて中を歩きながらたづなは説明を始める。

「この体育館は朝八時から遅くとも夕方十八時まで生徒が使用します。用務員となる真志場さんは主に学園が発注した備品などを運び入れる作業等で利用しますね。館内の清掃や設備の定期点検等は学園側で業者を雇っています」

彼女が指さしたのは広い体育館の奥にある「体育道具置き場」と書かれたプレート付

の扉。

御幸は頭の中で備品を持って運び入れる自分の姿をぼんやりイメージしていた。そんな時だった、一つのバスケットボールが何かの拍子で二人の方へ飛んできたのは。

飛んできたといつてもそんな勢いはなく、直前で床に落ちてコロコロと転がる。

「あ、すいませーん！」

バスケットボールが足元に転がった御幸は屈んでそれを拾い上げた。

たづなは駆け寄ってくるウマ娘に「大丈夫ですよー」と言つて、直後にハッと気づく。このまま彼が顔を上げて生徒にボールを返せば、必然的に生徒と顔を合わせる事になる。

慌てて制止しようとするが既に生徒は彼の目の前に来ていた。

その生徒は赤みがかった栗毛のツインテールのウマ娘“ダイワスカーレット”だった。

中等部とは思えないほど華やかで優美かつ母性の象徴が立派な容姿のウマ娘である。小生意気で勝気な性格から同室のウマ娘とよくケンカしていることで有名だ。

「ほー」

「あ、ありがとうー」

頭を下げてボールを受け取ろうとしたダイワスカーレットがピシッと石化する。

遠くにいてちゃんと見ていなかったが、彼女の目の前にいるのは強面の巨漢だった。

同じ男である彼女のトレーナー沖野とは全く別次元の存在と思える御幸。

たづながしまったと口に手を当ててダイワスカーレットを落ち着かせようとするが

「び、びゃあああああああああああああああ!!!」

ダイワスカーレットは体育館に反響するほどの甲高い悲鳴を上げてしまった。

御幸はある程度覚悟を決めていたので心的ダメージは大きくなかったのが救いだらう。

「アツハハハハ！どうしたんだよスカーレット、変な声上げて——」

彼女のルームメイトであり同じく中等部一年のウマ娘「ウオツカ」がやってくる。

濃い鹿毛にメツシユの入った、非常にボーイッシュユな容姿の彼女はダイワスカーレットの聞いたこともないリアクションに笑いながら近づいてきて——

御幸を見てダイワスカーレットと同じようにその場でピシッと石化した。

「あ、う——」

「す、スカーレットさんウオツカさん落ち着いて下さい！この人は新しく来た用務員の方で、決して今噂になつてゐる不審者等では——」

(ゴフツ……)

たづなのフォローはありがたいが、御幸は心の中で血を吐く勢いのダメージを受けた。

そんなカオスな状況で御幸を目にしたウオツカが取った行動はというと……

「ち、チンケなゴロでっ失礼しましたあああっ!!」

最近読んでいる格闘漫画のキャラクターが口にしていた目上の極道に対する挨拶の真似だった。

背筋を張って両手を身体の横にくっつけて九十度ピッタリの角度でのお辞儀。

幸いな事にこのネタが通じなかった御幸は首を傾げて「お、おう……？」と困惑していた。

それから数分後、教師に声をかけられて我に返った二人から謝られる事になる。

*

「……あ、あの……大丈夫ですかマシバさん？」

「問題ないですよ」

とは言うものの、薄ら笑いを浮かべる御幸の目は死んでいた。

早々と講堂の説明を終えて体育館を後にした二人は噴水の前に来ている。

ふと御幸は噴水の中央に立つ三女神の石像に目を向けた。

「……………」

「……………どうかしましたか？」

「ん、いや——なんでもないっすよ」

自分の中に疼く奇妙な感覚。

それを振り払って先に歩いていくたづなの後を追う御幸。

彼は何を思い、彼女らは彼の中に何を見出したのか……………？

まだ語るべき時ではない。

お兄さまの学園巡り その2

たづなと御幸が次に向かったのは体育館と講堂を出て真つ直ぐ進んだ先にあるエリア。

手前に広さが体育館並のダンススタジオ、左奥には学園内のベテラントレーナー達が設立したウマ娘のチームが使用する部室、ダンススタジオから更に奥へ進むと三階建ての図書館、図書館の脇には屋外プールと、その隣にはこじんまりとしたプレハブ小屋が間に建っていた。

御幸はそのプレハブ小屋に見覚えがあった。就職案内のページに載っていた写真の用務員室だ。

「あそこが俺の?」

「はいっ用務員室兼住居になります。前任者の方が定年で退職されたので今は使われていませんが、電気ガス水道は通っていますし、予め掃除はしてあるので中は綺麗ですよ」

「おお……ありがとう御座います」

実は御幸、ちゃんとした一人暮らしはこれが初である。

今まで世界中を飛び回る中で色んな国の人間とルームシェア、窮屈な車内泊、一部屋

で多人数での雑魚寝、テントを張つての野宿等は経験してきたが、身の回りの全てを自分でやるのは初だ。

氣を利かせた彼女が「少し中を見ていけますか？」と聞いて、彼は勢いよく首を縦に振る。

「中には一般に普及している固定電話とは別で学園内で使用する内線があります。こちらの内線は充電して頂いて、仕事の最中は常に持ち歩いて頂く事になります」

トレセン学園は広大だ。そこで働く人ひとりを探して呼ぶなら電話で呼び出すのが手取り早いだろう。個人所有の携帯電話等の番号を用いないのはプライバシー保護の為だとかなんとか……

そんな説明をしてたづなは「あつ」と自分のスマホを取り出して言った。

「万が一に内線が使えなかった場合や何かあった時用の連絡手段として、マシバさんの携帯に私の番号を登録しておいて貰えますか？」

「分かりました。ついでに俺のも渡しておきますね」

御幸はそう言つて懐からスマートフォンを取り出した。

そこで初めてたづなは彼の使っているスマートフォンが普通のと少し違うのに気づく。

彼が手にしたスマートフォンはデザインこそ最新のモデルだが一回り大きい。

「マシバさんのスマートフォン、メーカーはどの会社のものなんですか？」

「これですか？これは一般で販売されているの最新モデルの基礎部分だけに使って、外側のフレームとかは海外で親しくなった友人に防水性能とか衝撃に強い絶版になったハイエンドモデルの奴を特別に合わせて作ってもらった特注品なんですよ。自作PCならぬ自作スマホみたいな物です。……故障したら友人に修理を頼むか、自分で直さなきゃいけないから大変なんですけどね」

「……それはまた……凄い友人をお持ちなんですな」

「日本に着いてから連絡したら、某国のスパコンと張り合える性能のスパコン自作するぞおおお！とか叫んで俺に秋葉原で部品買って送ってくれて言っていました……面白いですよ」

「………本当に、凄い友人ですね」

しかし御幸が中をパツとたづなに見せると、画面やアプリは一般のそれを変わらない。
い。

彼は世界中を飛び回るボランティアで一体どんな経験をしたというのか。

今はまだその僅かな部分しか見せていないのだった……

*

御幸がこれから生活を送る用務員小屋は見た目に反して豪勢な代物だった。

占有面積30㎡の1LDKの前任者が残してくれた洗濯機や冷蔵庫は比較的新品で、奥の三畳の和室には学園側で用意してくれた新品の布団と枕がセットされている。

その他にもIHコンロ、クローゼットにしまわれた炬燵と扇風機、テレビ等の備えもいい。

「……これ本当に俺が使っちゃっていい部屋なんですかね……」

都会で働く社会人が数年かけて溜めたお金で暮らし始める高級マンション並の住居。

高卒で海外を飛び回っていた程度の大した経歴もない御幸が使うのを躊躇うのは当然だった。

彼の不安そうな顔を見てたづなは微笑んで「当然ですよ」と答える。

玄関脇の靴箱の上にあるのが件の固定電話と充電器に繋がれた内線だった。

一般家庭にはありそうな白い固定電話に対して内線は子機のみ。

平成の初めくらいに流行った携帯電話のような見た目で上に番号が振られている。

後の壁には内線のものと思われる連絡先の名前と番号が記された紙が貼ってあった。

01は理事長室、用務員室は11となっている。

「仕事が始まってから学園の各施設の戸締り確認等も行っていただく事になりますので、後日マシバさんにはマスターキーをお渡しますが……こちらは基本的に肌身離さず持ち歩いて、誰にも渡したりしないようにして下さい」

「分かりました。戸締りをするにあたって学園内の各施設警備システムの操作盤は何処に?。」

「それでしたら全体の制御盤が校舎裏の警備員室にありますので、後でご案内しますね」
「お願いします」

そんなこんなで用務員室を後にした二人は最初に図書館の方へと向かった。

暫く歩いていると、遠くで授業中にも関わらず図書館の周りをうろつく生徒のウマ娘がいた。

たづなと御幸は目を合わせ、御幸はその場で足を止めてたづなが生徒に駆け寄る。

図書館の前にいたのは葦毛のウマ娘“ゴールドシップ”だった。

「ゴールドシップさん何をやってるんですか?今は授業中ですよ」

「たづなさん!!いやそれがさあ聞いてくれよ。どつかのウマの骨がアタシのゴルシちゃん号を勝手に乗り回したみたいでさあ!ホームルームでちよーっと目を離れた隙にいななくなっちゃったんだよ。こりやもう許せねえ動物裁判だ…!!ってなわけでタイヤ痕を辿って此処まで来たって訳」

「はあ……それは授業を抜け出す理由になつてないと思いますが!」

「そりゃないだろお!この学園に来てからアタシがずうっと我が子のように愛情を注いだゴルシちゃん号が攫われたんだぜー!たづなさんも子を想う親の気持ちってのは分

かるだろー!」

「いえ……そう申されましてもですね……」

このゴールドシップというウマ娘、トレセン学園でも一、二を争う奇行種で知られている。

ある日突然セグウェイに「ゴルシちゃん号」と名前をつけて移動に用いたり、トレーニングと称してコースの端で詰め将棋をやっていたりとおかしな話題が絶えないウマ娘なのだ。

たづなが頭を抱えていると、ゴールドシップの興味は彼女の後ろで見守っていた御幸に向いた。

「おっ!?!なんだお前見かけねー奴だな……さてはお前がゴルシちゃん号を盗んだのか!?!」

「ご、ゴールドシップさん失礼ですよ!この人は新しく来た用務員のマシバさんです」
「真志場御幸だ。そのゴルシちゃん号とやらに俺は心当たりがないな」

「なあに……?新しい用務員だあ……?」

突然スカートの両脇に手を突っ込んで猫背のがに股で御幸へと詰め寄るゴールドシップ。

さながらチンピラが因縁をつけた相手に喧嘩を売るような体勢である。

たづなは止めようとするが、御幸は気にすることなく寧ろ自分を怖がらない彼女に驚いていた。

「……ジイイイイツ……！」

「……それ態々声に出す必要があるか？」

「ふーむ……成程、お前からゴルシちゃん号の匂いはしねえ……無実だ！」

「そりやありがたい、疑いが晴れたようでは何よりだ」

「今からその用務員室で茶ア貰って話してえところだが、今はゴルシちゃん号の安否を確認しなきゃなんねえ。日を改めて話しに来てやる！高級茶葉と高級茶菓子を用意して待ってろ！」

「おう、暇な時はいつでも遊びに来てくれ」

「うっしや言質取ったからなあ！忘れんじゃねえぞー！ー！」

言うや否やゴールドシップは明後日の方向へと駆けていく。

御幸は「やっぱウマ娘はえーなあ」と彼女の背を目で追っていた。

眉間に手を当てて苦労した様子のたづなが言葉を付け足す。

「ゴールドシップさんはあれが通常運転なんです。あまり深く考えたらダメですよ」

そう言って再び図書館へと向かうたづなに続く御幸。

このトレセン学園のウマ娘には今のところ二種類のタイプが存在する。

御幸を怖がる者とそうでない者。

彼はそれをこの学園巡りの後に嫌というほど思い知る事となる。